

IoT時代のプラットフォーム提供

すべてのモノがインターネットにつながる「IoT」時代にどんな価値を届けるのか。コニカミノルタが導き出した解は、あらゆるワークプレイスの課題を解決できるプラットフォーム「基盤」の提供だ。独自の技術で見えないものを見る化し、情報を集約・解析、そして最適な方法を提案。顧客企業のビジネストランスフォーメーション(変革)を支援するまったく新しい取り組みが始まる。

200万社とのつながり生かす

まだ寒さ厳しい3月のドイツ・ベルリン。コニカミノルタは新コンセプト、エッジIoTプラットフォーム「Workplace Hub」(ワークプレイスハブ)の発表会を開いた。ルーターを思わせる「Workplace Edge」、5角形の「Workplace Spoke」……。デザイン家電のような機器を前に、山名昌衛社長は

こう切り出した。「未来のワークプレイスを届けます」。

「未来のワークプレイス」という言葉にはこんな意味が込められている。単なるデバイスではない、現場の働き方を変える、これまでにないIoTのハブとなるプラットフォームだ、と。

製造、小売り、医療。どの業種・業態であっても設置するだけで、帳票や日報などの各種データのほか、監視カメラで得られる人の動き、リアルタイムでやりとりされる文書や画像などが集まる。Workplace



最初の発表はドイツで。世界中から集まった各分野の識者が、IoT時代の働き方について意見を交わした



開発を主導したBICヨーロッパのデニス・カリー氏

Hubはクラウドと連携しており、集約したデータを最先端ソフトや人工知能(AI)を使い解析。会議の効率化、工場のワークフローの改善、経営判断材料の提供まで、あらゆる課題への最適な解決方法を提示する。

スマートフォンが多くのサービスを利用できるハブであるように、Workplace Hubはセキュリティ、自動化など企業が求めるサービスを提供する。それは古代トイア戦争の戦況を一目で見た「トイの木馬」に似る。

しかも、世界各地に張り巡らせたサポート体制が、保守点検から細かな相談まで対応。専門の担当者や担当部署がない企業にも情報化を加速し、変革をもたらすことになる。

革新的な新コンセプト。それはまた、コニカミノルタ自身が「まったく新しい顧客価値を提供するべく、トランスフォームする」(山名社長)ことで生まれたものでもある。

山名社長がWorkplace Hubの基本構想を描いたのは、3年前にさかのぼる。時あたかも、IoT、AI、ロボットなどによる「第4次産業革命」が叫ばれていた。新時代にあった戦略は何か。検討を重ねる中で、「150カ国、200万社の顧客とつながっているという資産を活用し、関係を深化させ、

一緒に課題を解決するパートナーとなる」ことが、果たすべき役割と位置づけた。

他社と提携 収益モデルも一新

大きな方向性は2つ。つながるだけでなく、つながること得られるデータや画像に付加価値を加える。そして現場でデータを集め、解析し、結果を返す。「現場」での課題解決が、顧客が求めるサービスであり、働き方も含めた変革につながる導き出した。

サイバー空間も含めた事業モデルを構築するには、新たな視点が必要。山名社長は開発を、世界5カ所で立ち上げた新組織「BIC(ビジネスイノベーションセンター)」のひとつであるロンドンの拠点に託した。指揮を執ったのは北大西洋条約機構(NATO)で技術戦略を担ったシニアディレクターのデニス・カリー氏だ。

変えたのはほかにもある。他社との連携もそのひとつ。顧客が満足するプラットフォームの実現には、自社だけでは限界が出てくる。最先端のセキュリティ、ソフトを提供するため、マイクロソフト、ヒューレット・パカード・エンタープライズ、SAP、シスコシステムズといった大手IT企業と手を組んだ。導入企業はほしい機能が手に入り、大手IT企業は緻密なアフターサービスを提供してもらえ、誰もが利益を得られる「エコシステム」を作り上げた。

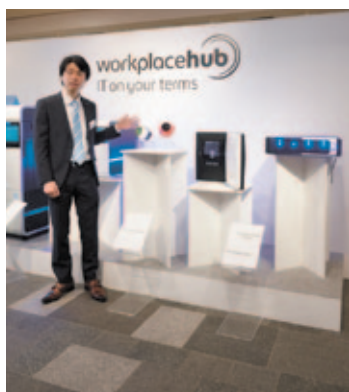
収益を得るマネタイズモデルも一新。利用するサービスに応じて月次で課金する形態に改めた。ハード機器を売り切る「バンダー」では



コニカミノルタ株式会社 代表執行役社長 兼 CEO

山名昌衛氏

なく、一緒に課題を解決する「パートナー」にふさわしい手法に切り替える。



多くの来場者を集めた日本プレビュー

そしてもうひとつ、Workplace Hubには重要な施策がある。最初のお披露目先にドイツを選んだことだ。

モノづくりで世界をけん引してきた日本の製造業。だが、インターネット革命では主役の座を米企業に奪われた。待ち受けていたのは製品のコモディティ化。自社は一線を画していたとはいえ、その状況に山名社長は歯ぎしりしていた。「たとえばグローバル化といながら、製品発表は日本。これでは世界で戦っていけない」。デバイスを作り上げる技術を持ち、サイバー空間との橋渡しができる。その思いが、海外での先行公開という形で表れた。

もちろん、変えなかつたものもある。カメラ、写真フィルムから培ってきた光学、画像処理、材料、微細加工といった技術はWorkplace Hubに息づいている。

特定分野で世界首位に立つ「ジャントップ」戦略を掲げ、A3カラー複合機では世界42カ国でシェア1位・2位を獲得。7年前からIoT関連のサービスを一緒に提供し、成長につなげたコニカミノルタ。IoT時代に対応した次なる事業モデルの幕は今秋に上がる。

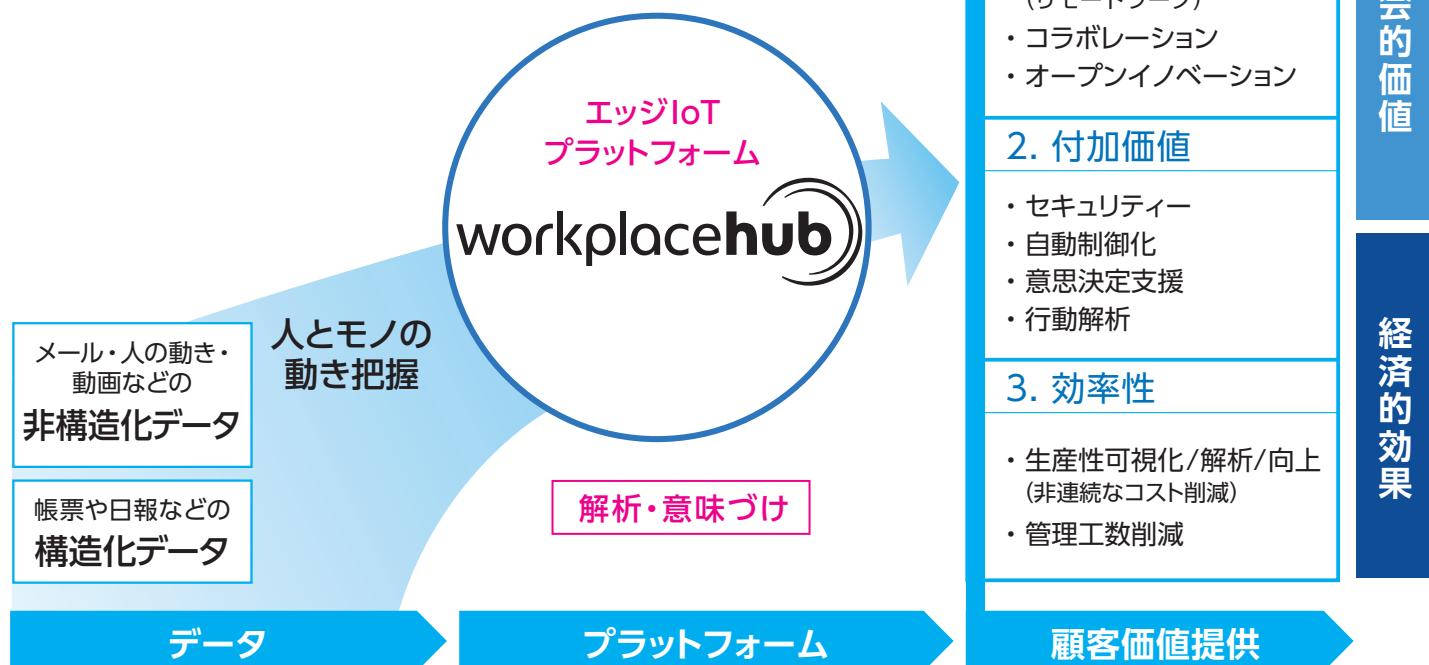
取材後記

顧客の変革促してこそその「ゲームチェンジ」

「新聞にIoT、AIという言葉が載らない日はないけれど、導入することで自分たちがどう変わり、どんな利点があるか示さないと、遠い世界のこととしか思えないですね」。山名昌衛社長の一言が胸に突き刺さった。この2つがあれば、革新的な未来がやってくる。そう単純化し、安易に読者に伝えてきたのではないかと反省した。顧客に目に見える成果を提供するため、コニカミノルタ

は事業モデルを大きく変えようとしている。望まれる価値を作り上げるには、従来スタイルを捨てることさえ必要になる。それでもまだ入り口にすぎない。山名社長は「ゲームチェンジにつながったといえるのは、利用企業が本当に変革を起こしてから」と続けた。転換を促してこそ、パートナーに選ばれる。ビジネスの厳しさを知るからこそその冷徹な視点がそこにはあった。

ビジネスを変える「Workplace Hub」



広告

企画・制作=日本経済新聞社クロスメディア営業局

提供: コニカミノルタ株式会社